

片隅で

コップだって悩むんだ  
どうしようもなく空っぽだから  
コップゆえに仕方がないんだ  
はずれの暗がりにて  
コップはただ震えるのみ

コップだって悩むんだ  
満たされることない存在価値を  
もろいその身を棚から投げ出し  
身ごとうつろを消し去るほどに  
だけどガラスに それも阻まれ  
叶うことない

役立つことなく 囚われていた  
コップにある日 一条の薄明かり  
差してはた気づく

水注ぐため コップは空っぽなのだと

それにこそ意味があって  
うつろのゆえに  
誰かを受け入れ  
空っぽのゆえに  
満たされることもあるのだと

棚の片隅でコップは揺れた  
さみしさからではなく  
ひとえによるこびから  
コップはただ震えるのみ

1969 月より

旗っていうのはただの布きれで  
言ってしまうと雑巾とおなじなわけだ

けれどもそいつは鮮やかに彩られ  
それぞれおもいが込められているらしい  
人は布きれに夢を描くわけだ

僕らの旗は何色だろう  
結局答えは尽きないけれど  
真っ白じゃないのは確かなわけだ

さらにそいつは模様もついて  
人の“存在”を証しているらしい  
だから月面に突き刺すわけだ

月に行った奴なんていない  
そう言う輩はどんな時代にも絶えないから  
ひたすら黙して 僕らは旗を掲げるわけだ

三日月の夜

愛したり殺したり それすらも理にかなう  
醜いまでに完璧な世界は  
満月のごとく翳りに浮かぶ

そんな世界で 悲しいほどに欠陥品  
楽天気取って  
まぼろし耽る 天の果て  
厭世に走って  
ひとり墮つ 失意の果て

こんな僕にも  
屈託なく微笑み  
理由なく捧げて  
一日の終わり告げるなら

ただそれだけで  
無理矢理に前向くことなく  
ひたすらに俯くことなく  
永い夜を過ごしていける

ただそれだけで  
時に傷つき 歩めなくとも  
理由<sup>わけ</sup>など つゆほどなくとも  
情なき世界を生きていける

ただ君だけが  
蒼く病める満月を  
美しく欠けさせる